

極楽の莊嚴 (vyūha) について

畝 部 俊 英

はじめに

極楽の功德の莊嚴は、法蔵菩薩が誓願を起こし、永い間にわたる思惟と六波羅蜜などの菩薩行を實踐して、その功德が結実したものである。

梵文『無量寿經』(*The Larger Sukhāvatīvyūha*)¹⁾によれば、法蔵菩薩は自らの誓願を表明するにあたって、次のように述べている。

ye mama prañidhānaviśeṣāḥ, yathā me 'nuttarāṃ samyaksaṃbodhim
abhisambuddhasyācintyaguṇālaṃkāravvyūhasamanvāgataṃ tad buddha-
kṣetraṃ bhaviṣyati.²⁾

(これは、わたくしがこの上ない正しいさとりをさとしたとき、かの
仏国土が不可思議な功德の嚴飾 (alaṃkāra)・莊嚴 (vyūha) をそな
えたものとなるであろうという、わたくしの、特別な、もろもろの誓
願であります。)

そして、誓願は成就して、法蔵菩薩自身は無量寿・無量光の阿弥陀仏と
なり、極楽は素晴らしい莊嚴をそなえた仏国土となるのである。まさしく、
それは親鸞聖人が『浄土和讃』において、

安樂仏土の依正は

法蔵願力のなせるなり

天上天下にたぐひなし

大心力に帰命せよ³⁾

と讃歎されたごとくであるが、インド仏教学の視点に立って見直してみると、極楽の莊嚴の具の一つ一つが仏塔の供養の具とほとんど一致することに注目させられる。

そこで、これまでの諸先学の研究成果に抛りつつ、極楽国土の功德の莊嚴について考えてみたい。また、L. Schmithausen 教授が指摘しているように、⁴⁾ 梵文原典による限り、極楽はきわめて自然に反した (extremely unnatural)、人工的な (artificial) 世界であるが、何故人工的であるのかについても、考えてみたい。

1

オックスフォード刊本の梵文『阿弥陀経』(*The Smaller Sukhāvatīvyūha*)⁵⁾では、全体が20章に分けられているが、3章、4章、5章、6章、7章、9章の、それぞれの章の最後のところに、次のような言葉が繰り返されている。

evaṃrūpaiḥ śāriputra buddhakṣetraguṇavyūhaiḥ samalamkṛtaṃ tad buddhakṣetram.⁶⁾

(シャーリプトラよ、かの仏国土は、このような、仏国土の、もろもろの功德の莊嚴 (guṇavyūha) によって、飾られているのである。)

すなわち、『阿弥陀経』における「功德の莊嚴」が何であるかが、これらの章において説示されているのである。たとえば第3章では、

punar aparaṃ śāriputra sukhāvatī lokadhātuḥ saptabhir vedikābhiḥ saptabhis tālapāṅktibhiḥ kaṅkaṇījalaiś ca samalamkṛtā samantato 'nuparikṣiptā citrā darśanīyā caturṇām ratnānām, tadyathā suvarṇasya rūpyasya vaidūryasya sphatikasya. evaṃrūpaiḥ śāriputra buddhakṣetraguṇavyūhaiḥ samalamkṛtaṃ tad buddhakṣetram.⁷⁾

(また、次に、シャーリプトラよ、極楽世界は、四つの宝石、すなわち金・銀・瑠璃・水晶からできている七 [重] の、もろもろの欄楯、

極楽の莊嚴 (vyūha) について

七 [重] のターラ樹の、もろもろの並木、鈴のついた、もろもろの網によって飾られ、あまねくめぐらされ、きらびやかで、美しい。シャーリプトラよ、かの仏国土は、このような、仏国土の、もろもろの功德の莊嚴によって、飾られているのである。)

とある。鳩摩羅什訳の対応箇所では、

又舍利弗、極楽国土、七重欄楯、七重羅網、七重行樹、皆是四宝、周币围绕。是故彼国、名曰極楽。⁸⁾

(また、舍利弗、極楽国土には七重の欄楯・七重の羅網・七重の行樹あり。みなこれ四宝をもって、周币し围绕せり。このゆえにかの国を、名づけて極楽という。)

とある。「功德の莊嚴」として、金・銀・瑠璃・水晶の四宝からできている、七重の欄楯、七重のターラ樹の並木 (行樹)、鈴のついた網 (羅網) が挙げられている。続いて、第4章では、金・銀・瑠璃・水晶・赤真珠・碼瑙・琥珀の七宝からできている蓮池、その周囲四方に、四宝からできている四つの階段と木々、蓮池の中に車輪ほどの大きさの、青・黄・赤・白・雑色の蓮華、第5章では、天の楽器が常に演奏され、昼夜六回、天のマーンダラーヴァの花の雨が降ることなど、第6章では、白鳥・帝釈鳩・孔雀がいて、昼夜六回、集まって合唱を行っていること、ターラ樹の並木や羅網が風に吹かれると、妙なる、快い音が流れ出てくること、そして、第9章 (第8章を含めて) では、阿弥陀仏が無量寿・無量光と言われる理由、その僧団は無量であることなど、が説かれている。

2

ところで、以上のような「功德の莊嚴」について、平川彰博士は律蔵に説かれている造塔法、伎樂供養法などと比較して、次のように述べている。

仏塔と極楽浄土との間に類似性のあることは、すでに中村元博士によって指摘せられているが、律蔵に説かれている仏塔の作り方と極楽

とを比較してみれば、さらに明らかである。仏塔の作り方は、『四分律』『五分律』『僧祇律』『根本有部律雜事』等にみられるが、とくに『僧祇律』に詳しい。以下その特徴の二、三を示すこととしたい。⁹⁾

そして、仏塔と極楽との類似性について具体的に指摘されている。それを箇条書きにしてみると、次のようになる。

- 1) 七重の欄楯…仏塔に欄楯があることは、上記諸律の造塔法にも言っているが、実際にもサーンチーやパールフットなどの塔の欄楯によって確かめられる。
- 2) 七重のターラ樹の並木…仏塔にも並木がある。塔の左右に木を植えることは『五分律』の造塔法に説いている。『僧祇律』にも、塔には菴婆羅樹・閻浮樹などの木を植えることを述べている。
- 3) 天の音楽・衆鳥の合奏・天の曼陀羅華の雨…仏塔でも、伎樂供養がなされることは、諸律に説いている。歌や舞、音楽をもって仏塔に供養する。さらに仏塔には、衣服・幡・蓋・華・香・飲食などを供えることを、律藏に説いている。
- 4) 池…仏塔にも池を掘ることが説かれている。塔の四方に蓮池を作れといっている。そこに種々の蓮華を植える。¹⁰⁾

『阿弥陀經』における極楽の「功德の莊嚴」と諸律における造塔法、伎樂供養法などについての記述には明らかに類似性が認められる。平川博士が「極楽浄土のモデルとしての仏塔」ということを主張される所以はここにある。

ところで、平川博士が仏塔と極楽との類似性について指摘されている、上記の箇条書き 3) には、仏塔への供養の具が上げられているが、これらの供養の具なるものは、阿含・ニカーヤ經典の一つ、釈尊の涅槃、葬儀、舍利八分、仏塔建立などについて述べている『大般涅槃經』の中に見出され、それが仏舍利を納めてある仏塔への供養の具となる（『摩訶僧祇律』・「伎樂供養法」¹¹⁾、『十誦律』・「花香環珞法」¹²⁾ など）のは、自然の成り行きであり、更に『法華經』の十種供養¹³⁾のように、定型表現となって、大乘

經典にも取り入れられている。これらのことに関しては、既に平川博士¹⁴⁾や田賀龍彦博士¹⁵⁾の論考において詳細に検討され、紹介されている。そこで、本稿においては、それらの論考とは別の角度から、供養の具について考えてみたい。

3

1. *Mahāparinibbānasuttanta* (『大般涅槃經』)

A) Tena kho pana samayena yamaka-sālā sabba-phāliphullā honti akāla-pupphehi. Te Tathāgatassa sarīraṃ okiranti ajjhokiranti abhippakiranti Tathāgatassa pūjāya. Dibbāni pi mandāra-va-pupphāni antalikkhā papatanti, tāni Tathāgatassa sarīraṃ okiranti ajjhokiranti abhippakiranti Tathāgatassa pūjāya. Dibbāni pi candana-cuṇṇāni antalikkhā papatanti, tāni Tathāgatassa sarīraṃ okiranti ajjhokiranti abhippakiranti Tathāgatassa pūjāya. Dibbāni pi turīyaṇi antalikkhe vājanti Tathāgatassa pūjāya. Dibbāni saṅgītāni antalikkhe vattanti Tathāgatassa pūjāya.¹⁶⁾

(さて、そのとき沙羅双樹が、時ならぬのに花が咲き、満開となった。それらの花は、如来に供養するために、如来の体にふりかかり、降り注ぎ、散り注いだ。また天のマンダーラヴァ華は虚空から降って来て、如来に供養するために、如来の体にふりかかり、降り注ぎ、散り注いだ。天の梅檀の抹香は虚空から降って来て、如来に供養するために、如来の体にふりかかり、降り注ぎ、散り注いだ。天の楽器は、如来に供養するために、虚空に奏でられた。天の合唱は、如来に供養するために、虚空に起こった。)

この文は、釈尊が涅槃に入られる前兆を示すものであるが、如来に供養するために、沙羅樹の花、天のマンダーラヴァ華、天の梅檀の抹香が如来の体に降り注ぎ、天の楽器が演奏され、天の合唱が行われたという。供養

の具が、既にここに見られる。

B) Yathā kho Ānanda rañño cakkavattissa sarīre paṭipajjanti evaṃ
Tathāgataṃ sarīre paṭipajjitabbam. Cātummahāpathe Tathāgataṃ
thūpo kātabbo. Tattha ye mālaṃ vā gandhaṃ vā vaṇṇakaṃ vā
āropessanti abhivādessanti vā, cittaṃ vā pasādessanti, teṣaṃ taṃ bha-
vissati dīgharattaṃ hitāya sukhāya.¹⁷⁾

(アーナンダよ、転輪〔聖〕王の遺体を処理するのと同じように、如
来の遺体を処理すべきである。四つ辻に、如来のストゥーパをつくる
べきである。誰であろうと、そこに花輪または香料または顔料をささ
げて礼拝し、また心を浄らかにして信ずる人々には、長いあいだ利益
と幸せとが起ころうであろう。)

ここでは、釈尊自らが如来の葬法について、転輪聖王と同じように処理
し、ストゥーパ（仏塔）を作ることを指示している。そして、そのストゥー
パに供養の具として、花輪、香料、顔料を捧げて礼拝すれば、利益と幸せ
が生ずるという。

C) Atha kho Kosinārakā Mallā ca purise ānāpesuṃ: 'Tena hi bhaṇe
Kusinārāyaṃ gandha-mālaṃ ca sabbaṃ ca tālavacaraṃ sannipātethāti.'

Atha kho Kosinārakā Mallā gandha-mālaṃ ca sabbaṃ ca tālavacaraṃ
pañca ca dussayuga-satāni ādāya yena Upavattanaṃ Mallānaṃ sāla-
vanaṃ yena Bhagavato sarīraṃ ten' upasaṃkamimṃsu, upasaṃkamtvā
Bhagavato sarīraṃ naccehi gīthehi vāditehi mālehi gandhehi sakkarontā
gurukarontā mānenta pūjenta cela-vitānāni karontā maṇḍala-mālāni
paṭiyādentā evaṃ taṃ divasaṃ vītināmesuṃ.¹⁸⁾

(そこで、クシナーラーに住んでいるマッラ族は人々に命じた。「それ
では、クシナーラーのうちにある香料と花輪と銅鑼をすべて集めよ」
と。そこで、クシナーラーに住んでいるマッラ族は、香料と花輪と銅
鑼をすべて取って、また五百組の布を取って、世尊の遺体のあるマッ
ラ族のウパヴァッタナ、沙羅樹林におもむいた。そこにおもむいてか

ら、舞踊、歌、音楽、花輪、香料をもって、世尊の遺体を恭敬し、尊重し、尊敬し、供養し、天幕を張り、多くの布の囲いをつけて、このようにしてその日を過ごした。)

この箇所では、マッラ族の人々が舞踊、歌、音楽、花輪、香料をもって、釈尊の遺体を供養したことを述べている。『大般涅槃經』には、漢訳諸本や、写本の断片からの復元によるサンスクリット本もあるが、ここではパーリのテキストで見てみた。以上の三箇所によって、釈尊の舍利や仏塔への基本的な供養の具が取り出せる。なお、「恭敬し、尊重し、尊敬し、供養し」という箇所は、次の *Mahāvastu* の B) の用例中のみならず、大乘經典にもしばしば見出される定型表現である。

2. *Mahāvastu* (『大事』)

A) *kṣatriyabrāhmaṇavaiśyā pūjām kāsi maharṣiṇo, nṛtyavāditragitena nānāmālyasamāgatā.*¹⁹⁾

(王族・婆羅門・庶民の者たちは、種々な花環を〔身につけて〕集まって来て、大聖者を舞踊・音楽・歌によって供養した。)

B) *yaśca khalu punaḥ bhikṣo tathāgatam etarahi tiṣṭhantaṃ yāpayantaṃ satkareyā gurukareyā māneya pūjeyā puṣpehi gandhehi mālyehi chatrehi dhuvajehi patākāhi vādyehi dhūpehi vilepanehi annapānayanavastrehi yaśca parinirvṛtasya sarṣapaphalamālam api dhātum satkareyā ity etaṃ samasamam.*²⁰⁾

(比丘たちよ、実にまた、いま住し、時を過ごしている如来を花、香料、花環、傘蓋、幢、幡、音楽、薫香、塗油、食料・飲料・車・衣服をもって恭敬し、尊重し、尊敬し、供養する者と、般涅槃した〔如来〕に対して、芥子菜の花輪でも置くことで恭敬する者とは、全く同じである。)

梵文『大事』から2例を取り出してみた。『大般涅槃經』に見られる供養の具をベースにしているが、それらが増広されている。B) の箇所について、田賀博士は「ここに見られる般涅槃した(如来)へと供養とは仏塔供養を意味するものであり、その仏塔への華鬘一つの供養が在世の如来へ

の種々な供養（伎楽を含む）と同じ価値をもつものであるとして、仏塔供養の価値を強調しているものである²¹⁾と述べている。大衆部系の部派においては仏塔供養を価値あるものと認めているのである。次に取り上げる初期大乘經典では、この増広されている形式が、固定化され、定型表現となって用いられる。

3. *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā* (『八千頌般若經』)

tata ekaikaḥ sattva ekaikaḥ saptaratnamayaṁ tathāgatadhātugarbhaṁ
stūpaṁ kārayet ekaikaś ca sattvas tān sarvān stūpān kārayet
kārayitvā ca tān pratiṣṭhāpya kalpaṁ vā kalpāvaśeṣaṁ vā sarva-
vādyaiḥ sarvagītaiḥ sarvanṛtyaiḥ sarvatūryatādāvacarair divyaiḥ sar-
vapuṣpaiḥ sarvadhūpaiḥ sarvagandhaiḥ sarvamālyaiḥ sarvavilepanaiḥ
sarvacūrṇaiḥ sarvavastrair divyābhiḥ sarvacchatradhvajagha-
ṇṭāpatākābhiḥ samantāc ca sarvadīpamālābhiḥ, bahuvidhābhiś ca
divyamānuṣikībhiḥ sarvapūjābhiḥ satkuryād gurukuryānayet pūjayed
arcayed apacāyet.²²⁾

(それから、一人一人の衆生がそれぞれ七宝からできている、如来の遺骨を納めたストゥーパをつくるとしよう。また、一人一人の衆生がそれらすべてのストゥーパをつくるとしよう。それらをつくり、安置して、一劫のあいだ、あるいは一劫以上のあいだ、あらゆる音楽、あらゆる歌、あらゆる舞踊、あらゆる楽器・銅鑼、天のあらゆる花、あらゆる薫香、あらゆる香料、あらゆる花環、あらゆる塗油、あらゆる抹香、あらゆる衣服、天の、あらゆる傘蓋・幢・鈴・幡、また周囲にあらゆる灯明・花輪によって、神々と人間たちにふさわしい、いろいろな、あらゆる供養によって、恭敬し、尊重し、尊敬し、供養し、崇敬し、尊崇するとしよう。)

梵文『八千頌般若經』では、このような文がいくつか見られるが、仏塔への供養の具は、やはり『大般涅槃經』や『大事』と基本的には同じである。仏塔へこのような供養の具が実際に捧げられたのであろう。ただし、

『八千頌般若經』が強調したいのは、仏塔への供養は福德が多いが、般若波羅蜜の經卷への供養は福德がもっと多いということである。このような言い方は、『法華經』も同様である。

4. *Saddharmapuṇḍarīkasūtra* (『法華經』)

tasmimś ca pustake tathāgatagauravam utpādayiṣyanti śāstragauraveṇa satkariṣyanti gurukariṣyanti mānayaṣyanti pūjayaṣyanti. taṃ ca pustakaṃ puṣpadhūpagandhamālyavilepanacūrṇacivaracchatradhvajapatākāvādy'adibhir namaskārāṇjalikarmabhiś ca pūjayaṣyanti. ye kecid Bhaiṣajyarāja kulaputrā vā kuladuhitaro veto dharmaparyāyād antaśa ekagāthāṃ api dhārayiṣyanty anumodayiṣyanti vā sarvāṃs tān ahaṃ Bhaiṣajyarāja vyākromy anuttarāyāṃ samyaksaṃbodhau.²³⁾

(そして、その經卷に対して、如来に対するような敬意を起し、師に対するような敬意をもって恭敬し、尊重し、尊敬し、供養するとしよう。さらに、花・薫香・香料・花環・塗油・抹香・上衣・傘蓋・幢・幡・音楽などによって、また敬礼・合掌をすることによって、その經卷を供養するとしよう。薬王よ、ある善男子たち、あるいは善女人たちがこの法門から一偈でも受持し、あるいは隨喜するであろうならば、薬王よ、わたくしはかれらすべての者にこの上ない正しいさとりを[さとりであるとうの] 記を授けるであろう。)

この梵文の「花・薫香…音楽、合唱」に対応する鳩摩羅什訳『法華經』・「法師品」の箇所は、十種供養の典拠として用いられるところであるが、²⁴⁾ 仏塔への供養の具が、ここでは經卷への供養の具として挙げられ、そして、この經卷の法門から一偈でも受持し、隨喜する者は、さとの記が授けられるという。

5. *Daśabhūmikasūtra* (『十地經』)

A) tadyathāpi nāma bho jīnaputrā yo rājñāś cakravartinaḥ putro jyeṣṭhakumāro agramahiṣīprasūtaś cakravartirājalakṣaṇasamanvāgato bhavati, taṃ rājā cakravartī divye hastisauvarṇe bhadrapiṭhe niṣāḍya

極樂の莊嚴 (vyūha) について

caturbhyo mahāsamudrebhyo vāry ānīya upari ratnavimānena
dhāryamāṇena mahatā puṣpadhūpagandhadīpamālyavilepanacūrṇacīva-
rachatrādhvajapatākātūryatādāvacarasaṃgītvīyūhena sauvarṇabhṛṅga-
raṃ gṛhītva tena vāriṇā taṃ kumāraṃ mūrdhanya abhiṣiṅcati.²⁵⁾

(たとえば、おんみら、仏子たちよ、長男として、正后より生まれ、
転輪 [聖] 王の相をそなえている、転輪 [聖] 王の息子がいるとして、
そ [の息子] を、転輪 [聖] 王は天の黄金の象の [背に置いた] 宝座
に坐らせて、四つの大海より水を汲んできて、花・薫香・香料・灯明・
花環・塗油・抹香・上衣・傘蓋・幢・幡・楽器・銅鑼・合唱の、大い
なる莊嚴 (vyūha) のある宝車が、その上 [空] に留めしめられつつ
あるとき、黄金の瓶を取って、その水をもって、その王子の頭頂にそ
そぐ。)

さて、上で見てきた、パーリの『大般涅槃經』から『法華經』までの、
花や抹香や音楽などは、釈尊、仏舎利、仏塔、諸仏、經卷と対象は異なっ
ていても、「供養の具」としてであったが、この『十地經』では、「花・薫
香…合唱」は、明らかに「莊嚴の具」として上げられている。転輪 [聖]
王という世俗的な王の宝車の莊嚴の具、すなわち飾りとしてである。しか
し、単なる飾りであるならば、他にもいろいろなものを上げることができ
るはずであるが、供養の具の定型表現である「花・薫香…合唱」を用いて
いることが注意されてよい。莊嚴の具が供養の具に由来することを示して
いる典拠とみなすことができると思うからである。供養の具が莊嚴の具に
なることは、当然のことである。たとえば、ある人が、仏塔に供養の具と
して捧げた花や薫香は、他の人々によって仏塔を飾る莊嚴の具と見られる。
仏塔とは、それ自体多くの人々によって捧げられた供養の具がすべて莊嚴
の具となって、成り立っているものである。極樂もまた、多くの人々が極
樂へ捧げた供養の具が、すべて莊嚴の具となって、成り立っている世界と
見ることができる。そして仏塔にしる、極樂にしる、供養の具という物質
的なかたちで表現されているが、仏塔への信仰、極樂への信心という宗教

心が根底にあってこそ、はじめて具象化が可能であることを見忘れてはならないと思う。『阿弥陀経』が、極楽は「功德の莊嚴 (guṇavyūha)」によって飾られているとする所以である。『阿弥陀経』に説かれている極楽が律蔵の造塔法に類似しているという平川博士の指摘は、以上のような意味を持つものと思う。もう一つ、『十地品』より、莊嚴 (vyūha) の用例を紹介しておこう。

B) taiś ca pāṇibhir daśasu dikṣu buddhapūjāyām prayujyate. ekaikena ca pāṇinā gaṅgānādīvalikāsamān puṣpapuṭaṃś teṣāṃ buddhanāṃ bhagavatāṃ kṣipati. yathā puṣpāṇāṃ evaṃ gandhānāṃ mālyānāṃ vilepanānāṃ cūrṇānāṃ cīvarāṇāṃ chatrāṇāṃ dhvajānāṃ patakānāṃ evaṃ sarvavyūhānāṃ.²⁶⁾

(これらの手によって、十方における諸仏の供養を行う。一つ一つの手によって、ガンジス河の砂と同じ [ほどの数多くの] 花の束をかの諸仏・世尊にまき散らす。花々と同じく、香料・花環・塗油・抹香・上衣・傘蓋・幢・幡を、同じくあらゆる莊嚴 (vyūha) を [まき散らす]。)

「花・香料…幡」と同じような、あらゆる莊嚴の具を供養の具として諸仏にまき散らすという表現になっている。釈尊、仏舎利、仏塔、諸仏、経巻などへの供養の具が莊嚴の具となったのであるが、いったん莊嚴の具となってしまうと、このように莊嚴の具が、供養の具となるのである。あるいは、この莊嚴の具が供養の具となるということから、何らかの仏教儀礼を見出すこともできるのではないかと思う。後世、ここに上げられている莊嚴の具は、五種供養とか、十種供養とかの、仏教儀礼にとって、欠かすことのできない重要な要素となっているからである。

Sukhāvatīvyūha (『無量寿経』)

本稿の「はじめに」の項において述べておいたように、法蔵菩薩の誓願

が成就した仏国土のすべてが、「功德の莊嚴」としての極楽の具体相であるが、そのことを説いている『無量寿經』にも、上来見てきたような供養の具・莊嚴の具を表す定型表現がある。それらについて、次に取り上げてみたい。最初に供養の具として表されているものを見てみる。

A) 23. sacen me bhagavan bodhiprāptasya, tatra buddhakṣetre ye bodhisattvā yathārūpair ākārair ākāṃkṣeyuḥ kuśalamūlāny avalopayitum, yad idaṃ: suvarṇena vā, rajatena vā, maṇimuktāvaiḍūryaśaṅkhaśilāpravāḍasphaṭikamusālagalvālohitamuktaśmagarbhādhīr-vānyatamānyatamaiḥ sarvaratnair vā, sarvapuṣpagandhamālyavilepanacūrṇacīvaracchatradhvajapatakāpradīpair vā, sarvanṛtyagīta-vādyair vā, teṣāṃ cet tathārūpā ākāraḥ saha cittotpādān na prādurbhaveyur, mā tāvad aham anuttarāṃ samyak sambodhim abhisambudhyeyam.²⁷⁾

(23. 世尊よ、たとえわたくしがさとりを得るとしても、もしもかしこの仏国土における菩薩たちが、どのような形のものをもってしても、すなわち、金あるいは銀、あるいは宝珠・真珠・瑠璃・貝殻石・珊瑚・水晶・琥珀・赤真珠・碼瑙など、あるいはその他、あらゆる宝石のなかのいずれかのもの、あるいはあらゆる花・香料・花環・塗油・抹香・上衣・傘蓋・幢・幡・灯明、あるいはあらゆる舞踊・歌・音楽をもってしてでも、もろもろの善根を植えようと欲するとして、もしそのような形のものが、かれらにとって心を起こすと同時に現われてこないようであるならば、その間は、わたくしはこの上ない正しいさとりをさとりません。)

設我得仏，國中菩薩，在諸仏前，現其徳本，諸所[※]求欲供養之具，若不如意者，不取正覚。²⁸⁾

※流布本 求欲＝欲求

(たとい我，仏を得んに，国の中の菩薩，諸仏の前にありて，その徳本を現じ，もろもろの求欲せんところの供養の具，もし意のごとくならずんば，正覚を取らじ。)

漢訳『無量寿経』の相当願文では、ここに上げられている善根の具を一括して「供養之具」と呼んでいる。なお、梵文では、定型表現の「花・香料…音楽」の前に、「金あるいは銀、あるいは宝珠…瑠璃など、あるいはその他、あらゆる宝石のなかのいずれかのもの」が加えられている。

B) 25. sacen me bhagavan bodhiprāptasya, tatra buddhakṣetre bodhisattvānām evaṃ cittam utpādyeta, yaṃ nā ihaiva vyaṃ lokadhātāu sthitvāprameyāsaṃkhyeṣu buddhakṣetreṣu buddhān bhagavataḥ satkuryāmo gurukuryāmo mānayaṃ pūjayaṃ, yad idam: cīvarapiṇḍapāṭasāyanāsanagḷānapratyayaḥśaṣṭyaparīkṣāḥ puṣpadhūpagandhamālyavilepanacūrṇacīvaracchatradhvajapatākābhīr nānāvidhanṛttagītāvāditaratnavarṣair iti, teṣāṃ cet te buddhā bhagavantāḥ saha cittaṭpādān tan na pratigṛhṇīyur, yad idam: anukampāṃ upādāya, mā tāvad ahaṃ anuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisambudhyeyam.²⁹⁾

(25. 世尊よ、たとえわたくしがさとりを得るとしても、もしもかしこの仏国土における菩薩たちに「われわれはまさにこの世界に住して、いわゆる上衣・飲食物・座臥具・病人に必須の医薬という〔四つの〕資具をもって、花・薫香・花環・塗油・抹香・上衣・傘蓋・幢・幡をもって、種々な種類の舞踊・歌・音楽・宝石の雨をもって、無量・無数の諸仏国土における諸仏・世尊を恭敬し、尊重し、尊敬し、供養したい」という、そのような心が起きるとしても、もしかれらにその心が起きると同時にその諸仏・世尊が、いわゆる憐愍によって、それを受け入れないようであるならば、その間は、わたくしはこの上ない正しいさとりをさとりません。)

これは梵文の第25の願文であるが、諸仏への供養の具として四資具が加えられている。宋の法賢訳『大乘無量寿莊嚴経』とチベット語訳以外、『無量寿経』および他の諸異訳には、これに相当する本願文はない。

C) tasya sarvaratnāṃkārāḥ, sarvavastracīvarābhīrharāḥ, sarva-puṣpadhūpagandhamālyavilepanacchatradhahajapatākābhīrharāḥ, sar-

極楽の莊嚴 (vyūha) について

vavādyasaṃgītyabhinirhārās ca sarvaromakūpebhyaḥ pāṇitalābhyāṃ
ca niścānti sma. sarvānapānakhādyabhojyalehyarasābhinirhārāḥ
sarvopabhogaparibhogabhinirhārās ca pāṇitalābhyāṃ prasyandantaḥ
prādurbhavanti. iti hi sarvaparīṣkāraśaitāpāramiprāptaḥ sa Ānanda
Dharmākaro bhikṣur abhūt, pūrvaṃ bodhisattvacaryāṃ caran.³⁰⁾

(あらゆる宝石の装飾品や、あらゆる衣服・上衣の品々、あらゆる花・
薫香・香料・花環・塗油・傘蓋・幢・幡の品々や、あらゆる音楽・合
唱の品々が、かれのあらゆる毛孔と両手の掌から出てきた。また、あ
らゆる食物・飲料・硬い食物・軟らかい食物・舐める食物・流動食物
の品々や、あらゆる使用物・受用物の品々が、両手の掌から流れ出て、
出現した。このように、実に、アーナンダよ、かのダルマーカラ比丘
は、前世に菩薩行を实践するとき、あらゆる資具自在の極みを得てい
た。)

阿弥陀仏が、かつて法蔵菩薩として、誓願を起こし、極楽の莊嚴を成就
するために菩薩行を实践しつつあったとき、毛孔や両手の掌から様々な
品々が出てきた。供養の具の定型表現が、ここにも用いられている。諸仏
を供養するための具は、極楽に生まれた菩薩たちも、掌の中に現れること
が、次のように説かれている。

D) tasmin khalu punar Ānanda buddhakṣetre ye bodhisattvāḥ
pratyājātāḥ, sarve ta ekapurobhaktenānyāṃl lokadhātūṃ gatvānekāni
buddhakoṭīnayutaśatasahasrāṇy upatiṣṭhanti, yāvac cākāṃkṣanti
buddhānubhāvena te yathā cittam utpādayanty: evaṃrūpaiḥ puṣpadī-
padhūpagandhamālyavilepanacūrṇacivaracchatradhvajapatākāvaijayan-
tītūryasaṃgītivādyaiḥ pūjāṃ kuryāma iti, teṣāṃ saha citta totpādāt
tathārūpāṇy eva sarvapūjavidhānāni pāṇau prādurbhavanti.³¹⁾

(また、実に、アーナンダよ、かの仏国土に生まれた菩薩たちは、す
べて、一 [朝] 食前の間に、他のもろもろの世界に行って、仏の力に
よって、欲するだけ十万・百万・千万の多くの諸仏に仕える。かれら

が、「[われわれは] このような花・灯明・薫香・香料・花環・塗油・抹香・上衣・傘蓋・幢・幡・樂器・合唱・音楽によって、供養をしたい」という心を起こすならば、かれらに[その]心が起きると同時に、まさにそのようなあらゆる種類の供養の具 (pūja) が掌の中に現れる。)

仏語阿難、彼国菩薩、承仏威神、一食之頃、往詣十方無量世界、恭敬供養諸仏世尊。随心所念、華・香・伎樂・繪蓋・幢・幡、無数・無量供養之具、自然化生、³²⁾ 念即到至。 ※流布本 語=告

(仏、阿難に語りたまわく、「かの国の菩薩は、仏の威神を承けて、一食の頃に、十方無量の世界に往詣して、諸仏・世尊を恭敬し供養せん。心の所念に随いて、華・香・伎樂・繪蓋・幢・幡、無数・無量の供養の具、自然に化生して、念に应じてすなわち至らん」と。)

諸仏供養の定型表現であるが、ここでは、供養の具はプージャー (pūja) という語で表されていることが、漢訳『無量寿経』の相当箇所「供養之具」の訳語との対応から分かる。最後の用例は、供養の具が莊嚴の具として満たされている仏国土が極楽であることを述べている。

E) te prīṇitakāyā yathārūpāṇi gandhajātāny ākaṃkṣanti, tadṛśair eva gandhajātair divyais tad buddhakṣetram sarvam eva nirdhūpitam bhavati. tatra yas taṃ gandham nāghrātukāmo bhavati, tasya sarvaṣo gandhasamjñānvāsanāpi na samudācarati. evaṃ ye yathārūpāṇi gandhamālyavilepanacūrṇacivaracchatradhvajapatākātūryāny ākaṃkṣanti, teṣāṃ tathārūpair eva taiḥ sarvaṃ tad buddhakṣetram parisphuṭam bhavati.³³⁾

(かれらは、身体が飽満して、どのような香りの種類を欲しようと、まさにそのような天の香りの種類によって、かの仏国土すべてがかおるのである。そこでは、その香りを嗅ぎたいと望まない者には、香りの想い・気分でさえも全く起こらない。このように、どのような香料・花環・塗油・抹香・上衣・傘蓋・幢・幡・樂器を欲しようと、かれら

極楽の莊嚴 (vyūha) について

には、まさにそのとうりのものによって、かの仏国土すべてが満たされるのである。)

この箇所は香りのことが述べられているので、莊嚴の具の定型表現を持ってきて、最初に上げられる「花」を省いて、「香料」から始めている。文意からすれば、香料のみでよいのであるが、極楽は供養の具が莊嚴の具となって、満たされている仏国土であるから、その定型表現が用いられたのであろう。

おわりに

『仏教と自然』(Buddhism and Nature) において、L. Schmithausen 教授は次のように指摘している。

23. 1) …, 仏教の理想世界、極楽浄土のような浄土世界においては、少なくともインド仏教のそれらにおいては、動物達が一匹も存在していません。いるのは鳥だけです(鳥の歌声も聞こえないということが考えられなかったのでしょうか)。しかしこれらの鳥達は、仏の神通力によって化作された存在であって、自然のままに生きている生物ではありません。

23. 2) これらインド仏教の浄土世界は、他の多くの点においても、きわめて自然に反したところがあります。山々がありません。四角い池があって(誰も彼も同じような)、大勢の人々が沐浴しています。樹木もあり花も咲いていますが、自然に生きている植物ではなく、大地と同様に、七宝でできています(従って、しほんだり、枯死することがありません)。この点から考えてみても、これらの(中世ヨーロッパの思想に類似すると思われる)浄土世界のイメージは、明らかに、文明を礼讃する生活態度と一致しています。³⁴⁾

「自然」という言葉でちりばめられている漢訳『無量寿経』や、「自然」という言葉が、一回ではあるが、効果的に用いられている漢訳『阿弥陀経』

極楽の莊嚴 (vyūha) について

を読み慣れ、そして知らず識らずのうちに、極楽という世界をいわゆる本覚思想的な感覚で受け入れてきた者にとっては、その極楽は自然の世界のように思われているが、全く意外なことにも、サンスクリット原典には、漢訳の「自然」に当たる語はないのである。むしろ、L. Schmithausen 教授が述べているように、極楽は自然に反した、人工的な世界である。

何故極楽は自然に反した、人工的な世界なのか。それは上来見てきた、パーリ『大般涅槃經』や梵文『大事』から『無量寿經』などの大乘經典にいたるまで、一貫して見出される定型表現に認められるように、釈尊・仏舎利・仏塔・諸仏・經卷などへの、その中でもとりわけ仏塔への供養の具が、そのまま極楽の莊嚴の具となっていることに主なる理由があると思われる。仏塔への供養の具であるから、そのほとんどの物が、素材は自然のものであっても、それを人工的に加工したものである。ただし、この地上の仏塔への供養の具は、たとえば花などは枯れてしまうのであるが、極楽の莊嚴の具である、七宝からできている花や木々は枯れない、消滅しない存在である³⁵⁾とするとともに、この無常の世界の仏塔と常住の極楽の、両者の相違が強調されているのである。

極楽の莊嚴 (vyūha) という場合の、莊嚴という意味は、梵文『十地經』の用例に見られるように、ある人または人々が捧げた供養の具が、他の人または人々にとっては (あるいは、捧げた当人たちにとっても)、莊嚴の具としてあることになる、素晴らしい「飾り」のことである。梵文『無量寿經』では、vyūha はしばしば alamkāra (嚴飾) と並べて表されているのも、「飾り」の意であることを示しているのであろう。

註

- 1) *Sukhāvativyūha*, édité par Atsuuji Ashikaga, Tokyo, 1965 (以下、*Sukh.* と略称)。なお、梵文の補正箇所については、藤田補正表 (藤田宏達『梵文和訳 無量寿經・阿弥陀經』昭和54年2月、第2刷)、裏頁20-42頁、および *Kotatsu FUJITA, THE LARGER SUKHĀVATĪVYŪHA, Romanized Text of the Sanskrit Manuscripts from Nepal*, Part 1, Part 2, Part 3, Tokyo, 1992, 1993, 1996 を参照。

- 2) *Ibid.*, p. 10, ll. 16-19.

極楽の莊嚴 (vyūha) について

- 3) 『新鸞聖人全集』・「和讃篇」昭和32年8月、改訂版、20頁、上段。底本は専修寺蔵国宝真蹟本『浄土和讃』。
- 4) Lambert Schmithausen, *Buddhism and Nature, The Lecture delivered on the Occasion of the EXPO 1990, An Enlarged Version with Notes*, Studia Philologica, Occasional Paper Series 7, Tokyo, The International Institute for Buddhist Studies, 1991, pp. 16–17. なお、大阪鶴見緑地国際花と緑の博覧会会場内において、1990年9月26日、国際シンポジウム「仏教と自然」が開催され、その時、配布された L. Schmithausen 教授の「仏教と自然」と題する英文の Paper とその和訳は、*Buddhism and Nature, Proceedings of an International Symposium on the Occasion of EXPO 1990, 国際シンポジウム 仏教と自然*, Tokyo, The International Institute for Buddhism Studies, 1991. に収められている。
- 5) *Sukhāvati-vyūha, Description of Sukhāvati, the Land of Bliss*, ed. by F. Max Müller and B. Nanjio (Anecdota Oxoniensia, Aryan Series, Vol. I, Part II), Oxford, 1883. なお、梵文の補正箇所については、註1)の藤田補正表、裏頁43–44頁参照。
- 6) Ibid., pp. 93–95.
- 7) Ibid., p. 93, ll. 9–13.
- 8) 『大正蔵』12巻、346頁、下段。
- 9) 平川 彰『初期大乘と法華思想』（『平川彰著作集』第6巻、1989年1月）17頁。
- 10) 同上、18–19頁。
- 11) 『大正蔵』22巻、498頁、下段。
- 12) 『大正蔵』23巻、415頁、下段。
- 13) 田村芳朗・藤井教公『法華経』上（仏典講座 7、昭和63年3月）530頁。
- 14) 平川 彰『初期大乘仏教の研究』Ⅱ（『平川 彰著作集』第4巻、1990年2月）257–316頁（第3章「部派仏教と仏塔の関係」）など。
- 15) 田賀龍彦「伎楽供養について」（『法華経の受容と展開』法華経研究 X Ⅱ、1993年10月、332頁）。
- 16) *Dīgha-Nikāya* (PTS. 以下、DN. と略称)、Vol. II, p. 137, l. 20–p. 138, l. 4. 和訳は、中村 元訳『ブッダ最後の旅—大パリニツパーナ経—』（岩波文庫、1980年6月、第1刷）による。ただし、他の和訳との調整のために、訳語を部分的に変更したところもある。以下、他の和訳についても、同じ理由で変更したところがある。
- 17) Ibid., p. 142, ll. 8–13.
- 18) Ibid., p. 159, ll. 14–24.
- 19) *Mahāvastu*, éd. par E. Senart, Paris, 1882–1897, Vol. I, p. 267, l. 21–p. 268, l. 1.
- 20) Ibid., Vol. III, p. 362, l. 12–15.

極楽の莊嚴 (vyūha) について

- 21) 田賀龍彦, 前掲論文, 12頁。
- 22) *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*, ed. by P. L. Vaidya, Buddhist Sanskrit Texts No. 4, Darbhanga, 1960, p. 34, ll. 19–24. 和訳は, 梶山雄一訳『八千頌般若經』I (『大乘仏典』 2, 昭和49年3月) 97頁参照。
- 23) *Saddharmapuṇḍarikasūtra*, ed by U. Wogihara and C. Tsuchida, Tokyo, 1994, p. 196, l. 23–p. 197, l. 5. 和訳は, 松涛誠廉・丹治昭義・桂 昭隆訳『法華經』II (『大乘仏典』 5, 昭和51年4月) 8–9頁参照。
- 24) 田村芳朗・藤井教公, 上掲書, 530頁。
- 25) *Daśabhūmīśvaro nāma mahāyānasūtram* ed. by Rūko Kondo (Rinsen Buddhist Text Series II, Kyoto, 1983) p. 183, l. 13–p. 184, l. 2. ratnavimāna を「宝車」と訳したのは, 河瀬光順『大乘道の実現 梵文十地經現代語訳註』, 昭和17年12月, 339頁参照。
- 26) *Ibid.*, p. 192, l. 14–p. 193, l. 2.
- 27) *Sukh*, p. 15, ll. 8–17.
- 28) 『大正蔵』12巻, 268頁, 中段。
- 29) *Sukh*, p. 15, l. 22–p. 16, l. 7.
- 30) *Ibid.*, p. 26, l. 24–p. 26, l. 6.
- 31) *Ibid.*, p. 50, ll. 2–9.
- 32) 『大正蔵』12巻, 273頁, 下段。
- 33) *Sukh*, p. 37, ll. 17–24.
- 34) 「国際シンポジウム 仏教と自然」に収められている, L. Schmithausen 教授の論文の日本語訳 (90頁) による。本稿の註4を参照。
- 35) ただし, 次のようなことは, 『無量寿經』に述べられている。極楽においては, 午前になると, 宝石の木々の花々は, 風に吹き動かされ, 宝石より成る地上に落ち, 人の身長七倍まで積もる。そして, 午前の時刻が過ぎると, これらの花々は残らず消え失せる, と。これは, 極楽の大地が花々によって汚されることのないことを言っているもので, 花々が無常であることを意味しているのではない。